

「特異児童作品展」の開催経緯と反響  
—1920-30年代における童心主義の展開—

忠 あゆみ 鹿沼市立川上澄生美術館

本発表は、1938年と39年に早稲田大学大隈小講堂および青樹社画廊で開催された「特異児童作品展」を、大正期から昭和戦前期の美術界における童心主義の展開の上に位置づける。

日本国内の児童福祉施設の入所児童による図画や木工作品を展示した「特異児童作品展」は、制作者としての子どもに目を向けた美術展として先駆的な事例である。寺田政明や北川民次など多くの美術関係者が足を運び、同展を巡り『みづゑ』誌上では芸術の定義についての議論が交わされた。しかし、戦時色の濃い社会情勢のなかで開催された同展は福祉的な側面が取り上げられることが多く、美術運動史における意義については検討の余地が残されている。

発表者は、この展覧会を美術界における童心主義の展開の上に位置づける。子どもを無垢なものと思えず童心主義の思想は大正期の文芸に芽生え、芸術性の高い童謡や童話を生んだが、昭和戦前期の美術界においては美術家による児童雑誌の挿絵や、子どもの絵が展示された展覧会が開催され、子どものイメージが多く見受けられるようになる。1920年代の大正期新興美術運動においては、芸術家の志向に子どもの絵が合致した。発表者は、上記のような童心主義の展開が、「特異児童作品展」に「床が抜けた」と伝えられるほどの来場者が訪れ、賛否両論の評価を受けた背景であると考察する。

本発表は、次の手順で同展の意義を考察する。第一に、展覧会の開催経緯と反響を確認する。「特異児童作品展」は、1930年代の児童福祉への関心の高まりを反映している。当時知的障がいのある児童のため相次いで設立された福祉施設では、効果的な教育法が模索されており、同展は手工芸を取り入れた教育法の成果を提示し、入所児童の能力の向上を示す意義があった。国家総動員法制定の年に開催され、障がい児の地位を確保する必要があったことに鑑みると、同展は戦時中の展覧会に通ずるプロパガンダ的な性格を持っていたといえる。

第二に、1920-30年代の美術界における子どもの絵の位置づけを整理する。同時多発的に精神病患者や子どもによる制作物に注目が集まった状況を踏まえ、本発表では大正期新興美術運動に関った村山知義や横井弘三の例を紹介する。「マヴォ」の村山による児童雑誌『子供之友』の挿絵には造形実験が見られ、「三科」のメンバーであった横井は1926年の「理想美術展覧会」を開催して小学生の絵を展示した。その制作背景から、プロとアマの垣根を無化する大正期新興美術運動にとり、児童文化に接近すること、子どもの絵を展示することに反アカデミズムや実験精神を表明する意味があったと論じる。

以上から、「特異児童作品展」の美術界における位置づけを考察する。大正期に興った童心主義は、純粋無垢な子どものイメージを前景化させたが、1920-30年代の美術界においては、子どもの絵それ自体が芸術的関心を引くようになっていた。この背景のもと「特異児童作品展」は反響を生んだのである。

(ちゅう・あゆみ)